

静岡県日中友好協議会

NEWS LETTER

No.128
2022.10



【特集】

- 日中介護サービス協力フォーラム
- 松本亀次郎と李徳全に学ぶ「写真展・シンポ」
- 交流往来・都市間交流 - 三島市と麗水市25周年
- China ビジネス 「日本産食品を中国へ」
- 中国report 「歴史建築物から寧波の今を見る」
- 浙江省の名酒を巡る旅 ~黄酒~
- History trip 「松本亀次郎の教え子 ～魯迅～」

花 曆 桂花 金秋の杭州、モクセイの香りに包まれる

省都・杭州の「市の花」は、モクセイ(桂花)です。9月末から10月初めにかけてモクセイの香りが街のあちらこちらに溢れ、風が吹くと黄色の小さな花が雪のように舞い、香りと共に目も楽しませてくれます。西湖湖畔には、金桂、丹桂、銀桂、四秀桂など多くの種類が植えられています。隋・唐の時代に、西湖湖畔にモクセイが植えられた記述があり、唐代の詩人・白居易も『憶江南』の中で、「山寺月中尋桂子」の一節にモクセイのことを取り上げています。

モクセイの花は観賞用としてだけではなく、香り付けの天然香料や、モクセイの花を砂糖で漬け込んだ「西湖糖桂花」、緑茶に混ぜた加工茶「桂花龍井」などの特産品があります。

【特集】日中介護サービス協力フォーラム 「介護人材の確保・育成の取組 ～日中の相互協力の事例から～」



8月9日(火)、静岡県・浙江省友好提携40周年記念事業として、日中介護サービス協力フォーラム「介護人材の確保・育成の取組～日中の相互協力の事例から～」（主催：静岡県、静岡県浙江省経済交流促進機構）が、オンラインで開催されました。フォーラムでは、日中双方の介護サービス分野の発展状況や経験などについて共有し、また、浙江省浙静老齢研究院の設立除幕式も行われました。

養老サービスの発展と進歩を推進

フォーラムでは、日中双方の養老サービス行政部門や養老機構の代表が集まり、それぞれの介護関連業界の発展状況、認知症ケア、情報通信技術(ICT)の介護業への応用及び日中介護人材協力などのテーマで、共通課題となる介護分野の取り組みを紹介しました。日中双方600人余りがオンライン閲覧し、双方の会場でも合計数十人が参加しました。

静岡県側は、「静岡県における高齢者福祉の現状」について、県福祉長寿政策課が発表し、また聖隸福祉事業団の運営管理課長は、観察を生かす「認知症ケアマッピング」を用いたパーソン・センタード・ケアの組織的な取り組みを紹介しました。県内で介護事業を展開しているインフィック(株)は、「介護人材の育成などとICTの活用」をテーマに、IT技術を活用できるIT介護士育成や各種センサー機器を使った安全対策などについて講演しました。

浙江省側は、中国健康養老集團研究院の張晋院長が、中国では60～75歳の高齢者が増加傾向にあり、日本の1995年前後の状況と似ているということなど、中国国内の動向を解説しました。9月には、シニア層が学位取得できる最大1500万人規模の大学が設立されることや、今後ヘルスケア産業が伸び、経済の中心となる見込みを示しました。

友好交流40年の今年、養老サービス分野の交流の機運が高まり、双方の交流事業の重要な部分となり、今後、両県省が共同で養老サービス分野の問題解決を推進するための「養老サービス交流協力プラットフォーム」の構築が期待されます。



【特集】 松本亀次郎と李徳全に学ぶ『写真展、講演・シンポジウム』

日中正常化50周年、静岡県浙江省友好提携40周年を記念して、「日中子ども写真展」と、日中友好の架け橋となった先人、松本亀次郎と李徳全に学ぶ「講演・シンポジウム」（主催：静岡県日中青少年写真展実行委員会）が8月～9月にかけて、浜松・掛川・静岡・沼津の4会場を巡回して開催されました。



松本亀次郎と李徳全に学ぶ「講演・シンポジウム」



各会場に、さまざまな講師を迎えて行われた「講演・シンポジウム」では、日中友好の懸け橋となった先人、松本亀次郎と李徳全について紹介されました。魯迅、周恩来、郭沫若などに日本語を教え、中国人留学生教育に生涯を捧げた、松本亀次郎（1866-1945/掛川市生まれ）と、新中国成立後、女性として初の厚生大臣、中国紅十字総会会長を兼任、戦後初の中国代表団を率いて、残留日本人3万2千人の帰国に尽力した李徳全（1896-1972）の努力に敬意を払いつつ、彼らの生き方や考え方などについて学びました。

日中の未来を繋ぐ『日中子ども写真展』

写真展では、日中両国の子どもたちを撮り続けてきた写真家・岡本央さんが撮影した、中国と日本の子どもたちの生活を切り取った作品が展示されました。

また、会場には松本亀次郎や李徳全に関するパネルも展示されました。





交流の歩み、25年

三島市と麗水市は、1997年5月12日に友好都市提携締結協定書調印式を行い、今年で友好都市提携25周年を迎えました。

麗水市は、浙江省の南部、省都の杭州から南へ300kmに位置

し、面積は約17,300km²です。地形は、90%以上が山岳地帯で、浙江省第2の河川である甌江（おうこう）をはじめ多くの渓流が市内を流れ、三島市と同様に「水と緑」の自然環境・景観に恵まれています。



【パネル展示で25年の交流成果を紹介】

水市も7月中旬～8月中旬に「麗水市・三島市 友好都市交流成果展」を開催するなど、コロナ禍で往来が難しい中でも友好交流を続けています。

両市の中学校、オンラインで相互交流

三島市の山田中学校は、麗水市の景寧中学校との間で、昨年から両校をオンラインで繋いでリモート交流を行っています。9月22日(木)、2年目のオンライン交流が行われ、両校の生徒が集い、活動発表会を開きました。発表会では、山田中学校側からは英語で三島クイズの出題や、三島伝統の祭りばやし「しゃぎり」が披露され、景寧中学校側からは民族楽器「二胡」で日本のアニメ曲の演奏や、当地の少数民族・畲(シェ)族の踊りなどが披露されました。このほか、両校の生徒がそれぞれ合唱を発表、互いに質問を交わすなどして、両国、両市、両校に対する理解と友情を深めました。



【景寧中学校：畲族の民族舞踊を披露】



【山田中学校：3年生全員で合唱】

日本産食品を中国へ ～KOLとフォロワーとの 信頼関係の中で行われるライブコマース～

中国では、オンライン中継でKOL（Key Opinion Leader）が商品を紹介するライブコマースが頻繁に行われています。自社店舗ブランドCOCOLAで、日本の商品をライブコマースで販売している易直播同天（杭州）有限公司社（本社浙江省・杭州市）の代表、狩野浩治さんにお話を伺う機会がありました。同社では、掛川一風堂様（掛川市）の瓶入りコーヒーなどの商品も、今後、ライブコマースで販売する予定です。狩野さんは、ライブコマースで次の3点が重要と指摘しています。



静岡県中国駐在員事務所長
浅原敏治



【掛川一風堂の荒川さん（中央）、狩野浩治さん（右）】

KOLを選定し、その後の販売が好調で、生産量が増やせるなら、よりフォロワー数が多いKOLにも販売してもらいます。



【COCOLAの店内】

①現地の需要に適した商品

国土が広い中国では、各地域によって嗜好が違います。例えば、四川省では売れるが上海では売れない、北京では売れるが浙江省では売れないという商品があります。ライブコマースでは、いつ、どの地域なら売れるのかをリサーチして商品選定する必要があります。

②生産者に適した環境での販売

実際に販売するも品不足で買えないとなると、KOLとフォロワーとの信頼関係を損なってしまいます。生産量に見合うフォロワー数を持つ

③視聴者に納得してもらえる販売

狩野さんの店では、京都の旗艦店の店頭で商品を販売する様子をライブコマースで放送し、実際に日本で販売されていることを付加価値として販売しています。日本で海外向けに製造している商品は、日本の商品というより、「日本式」の商品であり、自社の視聴者が求めている商品ではありません。もし「日本式」の商品を販売すると、KOLとフォロワーとの信頼関係を崩すことにつながるので、注意して取り組んでいます。

狩野さんは、中国での商売において特に重要なものは、「信頼関係」であると力説します。「3つの点を踏まえ、“ファンに販売したい”とKOLが意気込む商品であれば売れます。信頼関係の中で、皆が満足する日本の商品を、今後もライブコマースで販売していきます」。当事務所もライブコマースを活用して、県産品の販売促進を目指し、取り組んでいきたいと思います。

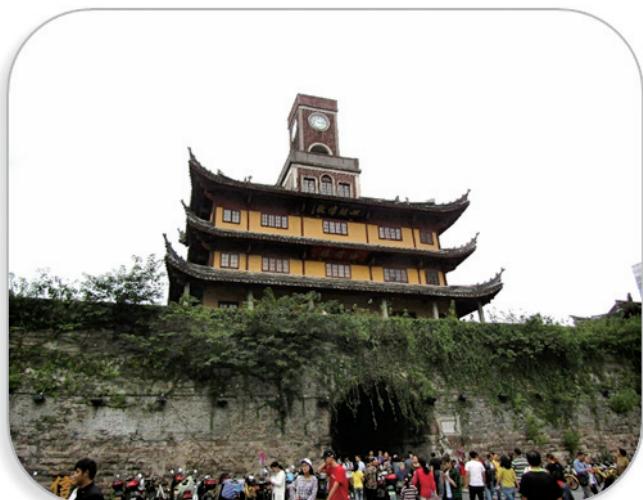
歴史的建築物から 寧波の今を見る ～鼓楼～

静岡県立大学グローバル地域センター特任准教授
寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県日中友好協議会交流推進員

横井香織



寧波で最も活気にあふれた天一広場からほど近いところに、鼓楼があります。これは、中国の城郭都市に建てられた太鼓を設置するための建物で、太鼓は時刻や緊急事態を知らせるために鳴らされました。寧波の鼓楼は、唐の長慶元年（821年）、明州子城の南門に建てられた最も歴史のある建物です。とはいっても、何度も破壊と再建をくり返し、現存する建物は、1855年に再建されたものです。



代に人気のあるブランド品などは見当たらず、浅草の仲見世通りのような庶民的な雰囲気を感じるのであります。同僚によれば、鼓楼のエリアは、寧波を代表する伝統的な食や文化が集まるところだそうです。商店だけでなく、絵画や楽器演奏などの教室があり、文化活動の集散地でもあるようです。だから老寧波人（寧波に生まれ寧波で育った人びと）が懐かしさや親しみを感じ、好んで出かけるということなのです。そういえば親しくなった茶器専門店の女性店主は老寧波人で、よく訪ねてくる客人もまた老寧波人でした。2人の会話は、普通話（北京語）ではなく、寧波話（寧波語）でした。鼓楼地区の周辺には、宋、元、明代に使用された倉庫跡（永豊庫跡地）や城壁遺跡、少し離れたところには、中国で最も古い図書館である天一閣などが点在しています。街中にある遺跡や歴史的な建造物は、寧波の人びとの日常と同居していて、不思議なくらい違和感がありません。

洗練されたおしゃれなショッピングエリアの天一広場近くに存在する、古きよき老寧波の風景。油贊子（伝統的なお菓子）や切り絵、玩具などがならび、老寧波人が散策する通りや路地。鼓楼は、寧波の歴史や文化の重みを感じるこのエリアの象徴なのです。

鼓楼の門をくぐると、広い商業エリアが広がっています。ここは小吃店（軽食堂）をはじめ、お菓子、雑貨、切り絵、絵画、刺繡、彫刻、楽器などを売る大小さまざまな店舗が並んでいる鼓楼歩行街です。寧波物産店は2階建てで、果物や銘菓、それに寧海の黒豚の肉や海産物なども販売していました。メイン通りだけでなく、いくつもの路地があり、かなり広いエリアです。同僚の案内で、商業エリアの一角にある茶葉の専門店や、肉や魚、野菜が並ぶ巨大なセンター市場へも出かけました。

何度か訪れるうちに、近くにある天一広場とはだいぶ雰囲気が違うことに気づきました。若い世



浙江省の名酒を巡る旅 黄酒

黄酒は米・麦・とうもろこしなどの穀物を原料に、麹の力で糖化・発酵させて造られる醸造酒で、ビール、ワインと並ぶ世界最大の古酒です。酒色は、濃黄色や赤味をおびた黄色のものが多いことから「黄酒」と呼ばれ、黄酒の中でも長期熟成させたものを「老酒」とも呼びます。黄酒はそれぞれの地方独特の伝統的な方法によって醸造され、種類が非常に多く、一つ一つに独特的な個性があります。その中で紹興酒は黄酒を代表する最高峰のお酒で、紹興黄酒、紹興老酒とも呼ばれています。紹興酒の醸造技術は2006年に無形文化遺産に認定されました。

「黄酒の銘品・紹興酒」

アルコール度数15~20度の紹興酒は黄酒の中でも銘酒と評価されています。主原料は糯米と麦麹、辣蓼草（からだて）、陳皮、肉桂、甘草などで作られた薬酒を用いています。紹興酒は『紹興市の名水と称される鑑湖の清水で仕込み、製造後3年以上の貯蔵熟成期間を経て製造したもの』という厳密な定義があります。また、現在では中国政府によって、紹興市以外の土地で作られたものは、「紹興酒」を名乗ってはいけないことになっています。漢方薬の薬引（塗り薬）としても使用されています。



一般に、紹興酒は鶏肉や鴨料理と相性がいいといわれていますが、熟成年数の違いで、合う料理が異なります。紹興酒はワインと同じように甘口から辛口の4種類に分かれています。糖分含有量によって香雪（甘口）、善釀（中甘）、加飯（中辛）、元紅（辛口）があり、市販されている紹興酒のほとんどは、加飯に分類される中辛が主です。

紹興の継承文化にかつて、娘が生まれたのを機に新酒の紹興酒の甕を地中に埋めて、娘が嫁ぐ日にそれを掘り起こして振舞われ、また絵付け（花彫）して嫁入り道具にしたという伝統があったため、紹興酒は「花彫酒」という別称で呼ばれることもあります。今日では、この花彫酒が長期熟成種の愛称としても使われ、この熟成の長さに応じた味わいの変化が紹興酒の魅力でもあります。

「独特の味わいをもつ嘉善黄酒」

嘉興市の嘉善県にも、特色ある銘酒「嘉善黄酒」や「西塘黄酒」があります。嘉善の醸造業は、明清時代には、すでに非常に発達しており、西塘には、歴史上多くの黄酒工房がありました。もち米と熟成した黄酒を原料とし、伝統的な製法と技術で冬に醸造されています。「嘉善黄酒」の酒色は黄色、透明で光沢があり、香りが豊かで甘く、まろやかで柔らかい半甘口の黄酒で、18種類のアミノ酸を含み、栄養価も豊富です。「西塘黄酒」も、まろやかで芳醇、独特の味わいがあります。

松本亀次郎の教え子 魯迅



【魯迅】

日清戦争後、清朝政府は日本へ派遣する留学生の受け入れを、日本政府に依頼しました。その後年々、日本留学のニーズが拡大し、1902年、清国の留学生のために予備教育機関「弘文学院」（翌年、宏文学院に改名）が、嘉納治五郎によって設置されました。松本亀次郎は、ここで日本語指導にあたり、魯迅はその教え子の一人です。

魯迅（本名：周樹人）は、1881年浙江省紹興に生まれました。代々学者の家筋で、祖父は翰林学士（かんりんがくし）で北京に住み、父親も相当の学問を修めた人でしたが、その後、祖父の投獄、父の病死と続き、家は貧困状態となります。魯迅は、17歳の年に南京の江南水師学堂に給費生として入り、翌年江南陸師学堂付属の鉱路学堂に移って1902年に卒業します。当時の清朝政府は、日清戦争後ということもあります。近代化を担う人材育成のための日本留学を勧めており、魯迅は20歳の若さで、官費留学生として日本へ派遣されました。

来日後、魯迅は先ず、東京の弘文学院予科に入学し、この学校で2年間、日本語のほか算数、理科、地理、歴史などの教育を受けました。日本留学の1年目、魯迅は日本語や普通課程の勉強に全力を尽くしていたといいます。当時の同級生は、「当時、魯迅の弘文学院での勉強量はかなりすごいもので、普段毎日深夜まで一生懸命勉強し、驚かされる程の意志力だった」と魯迅の生活ぶりを語っています。

1903年に弘文学院に招かれた松本亀次郎は、最初に担当したクラスで、のちに「中国近代文学の父」と称される魯迅こと周樹人と出会い、ここで日本語の指導にあたりました。松本亀次郎の回想によると、魯迅の日本語翻訳は最も穩当かつ流暢だったため、「魯訣」と言って訳文の模範としていたほど優秀でした。来日後2年目から、魯迅の活動は学校での勉学の範囲を超えて、様々な面にまで及び始めました。「欧米や日本の書籍を涉獵し、日本語を学びながら翻訳をしていた」と同級生は語っています。

その後、魯迅は仙台医学専門学校（現東北大学医学部）に入り、1909年の8月まで日本に滞在し、日本での留学は7年余りとなりました。仙台医学専門学校留学時代の魯迅と藤野先生との師弟交流は、小説「藤野先生」で伺い知ることができます。

魯迅は日本滞在中に、中国人への精神啓蒙・思想啓蒙・科学啓蒙の活動に力を入れ始め、祖国の危機、中国人の精神を救うために自らの力を捧げる信念を固めていきました。文学の道に進むことを決心した魯迅は、仙台医学専門学校を退学しましたが、この留学は、さまざまな意味で魯迅の出発点となり、彼の思想と文学の骨格は、この時期に作り上げられました。



【松本亀次郎】